



リサと雲のお城



リサは、窓の外を眺めるのが大好きな女の子。ある晴れた日の午後、リサは真っ白な雲の中に、まるでお城みたいな形をした雲を見つけました。

「ねえ、ミケ。あのお城、本物だったら素敵だね！」



その夜、リサがベッドに入ると、窓からキラキラと光るものが舞い込んできました。それは、ふわふわの雲でできた、小さな羽でした。「わあ、きれい...！」リサがそっと手を伸ばすと、羽はリサの手に乗り、優しく光りました。



次の瞬間、リサと、リサの足元で丸くなっていたミケの体が、ふわりと宙に浮きました。「きゃあ！」びっくりしたリサを乗せて、雲の羽は窓から夜空へと飛び出していきました。



「見て、ミケ！おうちが
あんなに小さいよ！」眼
下には、まるでおもちゃ
箱をひっくり返したみた
いに、町の明かりがキラ
キラと輝いています。リ
サとミケは、夜の空をぐ
んぐん進んでいきまし
た。



しばらく飛んでいると、
目の前に大きな大きな雲
が見えてきました。昼間
に見た、あのお城の雲で
す！お城のてっぺんから
は、虹色の光が優しくこ
ぼれていました。



お城の門をくぐると、そこは雲でできた不思議な世界。雲のウサギが跳ねまわり、雲の小鳥たちが楽しそうに歌っています。「こんにちは！」リサが挨拶すると、雲の動物たちはにっこり笑って、お辞儀をしました。



ミケは、ふわふわの雲の絨毯の上で、雲のちょうちょを追いかけて大はしゃぎ。「まてまてー！」
ミケがジャンプするたびに、キラキラした光の粒が舞い上がります。



お城の一番高い塔に登ると、そこには優しいお月様が座っていました。「よく来たね、リサちゃん。このお城は、みんなの素敵な夢でできているんだよ。」



リサとミケは、お月様から星の形をした甘いお菓子をもらいました。雲の椅子に座って、キラキラの夜景を見ながらお菓子を食べるのは、最高の気分でした。



そろそろ、おやすみの時間。お月様が優しく手を振ると、リサとミケは再び雲の羽に乗って、ゆっくりと自分のおうちへ帰っていきました。「また遊びに来てね。」遠ざかるお城から、優しい声が聞こえた気がしました。次の日、リサが目を覚ますと、枕元にキラキラ光る星のかけらが一つ、落ちていました。

